

旅 装

まぶしくらゐる 日は
部屋に隅まで さしてゐた
旅から帰つた 僕の心……

ものめづらしく 椅子に凭り
机の傷を撫でてみる
机に風が吹いてゐる

——それはそのまま 思ひ出だつた
僕は手帖をよみかへす またあたらしく忘れるために

——その村と別れる汽車を待つ僕に
平野にとほく山なみに 雲がすぢをつけてゐた……

立原 道造(たちはら みちぞう)

1914年(大正3年)7月30日 - 1939年(昭和14年)3月29日)は、昭和初期に活動し24歳で急逝した詩人。また建築家としても足跡を残している。

東京帝国大学工学部建築学科卒業。

詩作の方面では物語「鮎の歌」を『文藝』に掲載し、詩集『ゆふすげびとの歌』を編んだ他、詩集『萱草に寄す』、『暁と夕の詩』と立て続けに出版、発表し建築と詩作の双方で才能を見せた。

1939年(昭和14年)、第1回中原中也賞(現在の同名の賞とは異なる)を受賞したが、同年3月結核のため24歳で没した。

道造の優しい詩風には今日でも共鳴する人は多く、文庫本の詩集もいくつか刊行されている。

また存命中に今井慶明が立原の2つの詩を歌曲にして以来、柴田南雄、高木東六、高田三郎、別宮貞雄、三善晃などが作曲している。

「旅装」旅から帰った詩人の心は、まだ旅装のまま、村を思い出している。その村とは、信濃追分のことにちがいない。

「——それはそのまま 思ひ出だつた」——その村と別れる汽車を待つ僕に／平野にとほく山なみに 雲がすぢをつけてゐた……」この三行は、やはり達治の連作詩「友を喪ふ」(親友梶井基次郎を追悼したもの)の一つ、「路上」を思い出させる。

巻いた楽譜を手にもつて 君は
丘から降りてきた 歌ひながら

村から僕は帰つてきた 洋杖を
振りながら

……ある雲は夕焼のして春の鳥
それはそのまま 思ひ出のやう
なひと時を 遠くに富士が見
えてゐた

この単一で明澄な達治の詩境が、彼の氣に入っていたのにちがいない。ところが達治の詩は単一な独白体であるのに、道造の詩では、その間に、「僕は手帖をよみかへす またあたらしく忘れるために」という一行を入れ、思ひ出の過去との断絶をはかっている。

「そのような客観性と非情さに裏付けされているために、彼の抒情はべたつかない。——ここに彼の詩が、近代抒情詩たりえるモメントがある。この詩は旅から帰って、むしろ旅装を解いた折のものだが、にもかかわらず「旅装」と題されているのは、もはや常住の場所をもたぬ、漂泊する魂を自覚しての上のことであるに違いない」(鈴木亨「現代文学講座」昭和編Ⅰ)「忘れるために」手帖を読むというのは、忘れなければならぬという自意識が強く働いているのであり、そういうところに、この詩人の若さがある。

のちのおもひに

夢はいつもかへつて行つた 山の麓のさびしい村に
水引草に風が立ち
草ひばりのうたひやまない
しづまりかへつた午さがりの林道を

うららかに青い空には陽がてり 火山は眠つてゐた
——そして私は
見て来たものを 島々を 波を 岬を 日光月光を
だれもきいてゐないと知りながら 語りつづけた……

夢は そのさきには もうゆかない
なにもかも 忘れ果てようとおもひ
忘れつくしたことさへ 忘れてしまつたときには

夢は 真冬の追憶のうちに凍るであらう
そして それは戸をあけて 寂寥のなかに
星くづにてらされた道を過ぎ去るであらう

「のちのおもひに」の標題は、「のちのおもひにうたへる歌」というほどの意味で、拾遺集卷十二の「逢ひ見てのちの心にくらぶれば昔は物を思はざりけり」（藤原教忠）を意識したものである。彼は、西欧の文学教養を身につけるとともに、多分に美の意識において純粹であつたわが国古典の歌人たちの発想に心ひかれていた。彼はこの年の夏も追分を訪れたが、その途次汽車の中で一少女と知り合う。彼女は別れる時、肌につけていた水晶の十字架を彼に与えた。追分では、以前知り合つた少女を待つが、東京から別れの手紙を寄越して姿を現わさない。これら重なる別離を経験した彼は、心の痛みに耐えかねたのであろう、夏の終りにひとり飄然と近畿への旅に出るのであつた。島、波、岬、日光月光（奈良東大寺の仏像）は、彼の遍歴の意味深い単位である。